

男性胃癌患者において術前の筋肉量評価は術後合併症発生予測に有用である

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 卓司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00023888

主論文の要旨

男性胃癌患者において術前の筋肉量評価は術後合併症発生予測に有用である

東京女子医科大学消化器外科学教室

(指導：山本 雅一 教授)

山田 卓司

日本消化器外科学会雑誌 第48巻 第4号 291頁～296頁

(平成27年4月17日発行)に掲載

【要旨】近年、栄養評価法として体成分分析機器が開発され、筋肉や脂肪量の精密な測定が可能となった。今回、胃癌患者の術後合併症予測における術前筋肉量評価の有用性を検討した。2011年9月から2013年7月に胃癌の手術を施行した男性90例を対象とした。術後合併症が発生した群（合併症群：15例）と発生しなかった群（非合併症群：75例）で術前の年齢、体重、Body mass Index（以下、BMIと略記）、体成分分析で得られた体筋肉率と体脂肪率、身長で補正した筋肉量に加え、小野寺指数、Modified Glasgow Prognostic Scale（以下、mGPSと略記）をretrospectiveに比較検討した。体成分分析には生体電気インピーダンス法（Bioelectric Impedance Analysis：以下、BIAと略記）を用いた。単変量解析では、合併症群で有意に術前併存疾患を有する症例が多く（ $p=0.0352$ ）、BMIが高値（ $p=0.0033$ ）、体筋肉率が低値（ $p=0.0001$ ）、体脂肪率が高値であった（ $p=0.0021$ ）。多変量解析では体筋肉率低値のみが独立した術後合併症のリスク因子となった（Odds比 1.875、 $p=0.0098$ ）。男性胃癌患者において術前の筋肉量評価は術後合併症発生予測に有用であった。